

東京府が目指した煉瓦庁舎の建設



「東京府庁舎新築之図」『東京府庁舎新築大要 完』(請求番号:府刊C74)

明治5年(1872)、政府は東京府庁舎を常盤橋内^{ときわ}にあった文部省所管の元津県藩邸へ移すことを打診しますが、府は建物の腐朽と立地を理由にそれを断り、鍛冶橋内の旧高知県邸への移転を希望します。また、府は、東京(江戸)が江戸時代から度重なる大火災に遭い、多くの建物が焼失してきたことから、銀座煉瓦街に代表される耐火建築を推進していました。このため、府は新庁舎も煉瓦造で建てることを目指していました。

2代目東京府庁舎は、明治21年(1888)1月、建築家・妻木頼黄^{つまきよりなか}に設計を依頼、同年4月に設計案が府会で可決、翌年(1889)5月、鍛冶橋門内に起工しました。途中、明治26年(1891)10月に発生した濃尾地震で煉瓦建築に多くの被害が出たことから、耐震を強化するための設計変更を行い、明治27年(1894)7月、煉瓦造の庁舎として竣工しました。